

# 月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



おそろいのユニフォームで、学園祭に臨む「南三陸おらほ学園」メンバー

## 特集

## 若さあふれる 地域づくり

- 遊び心あふれる、つながりづくりと新しいチャレンジの場 ③  
南三陸おらほ学園（宮城県南三陸町）
- 音楽の力でまちを元気に！新しい船を動かす若き力 ⑤  
女川福幸丸（宮城県女川町）
- まちの魅力を再発見する復興コミュニティづくり ⑦  
わかものまちづくりサークル からくわ丸（宮城県気仙沼市）

☆ 専門家に聞く地域づくりのヒント  
(大阪市立大学大学院 経済学研究科 教授 福原 宏幸さん)

- 東北の元気④ ⑨  
はんざわ商店（宮城県石巻市）
- まちの仕組み⑩ ⑩  
住民を信じ、支え合いの力を引き出す（宮城県南三陸町）
- まじわる災害公営住宅⑫ ⑫  
泉中央南市営住宅（宮城県仙台市泉区）
- まじわる災害公営住宅⑬ ⑬  
鹿野復興公営住宅（宮城県仙台市太白区）
- 平成・向こう三軒両隣事情⑭ ⑭  
ご近所福祉クリエイション主宰 近所福祉クリエイター 酒井 保さん
- 宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ ⑮
- 東北の元気⑮ ⑮  
一般社団法人 はまのね（宮城県石巻市）

特集

# 若さ あふれる 地域づくり

今回の特集は、これからの地域づくりを担う新しい世代の挑戦をご紹介します

地域の魅力を掘り下げ、「学園祭」で披露し合う機会を設けた「南三陸おらほ学園」  
地域を音楽で元気にしたいと、「我歴 STOCK」という名のイベントを始めた「女川福幸丸」  
地域の魅力を再発見する「あるもの探し」の活動を展開する「からくわ丸」

3つの団体の主役は、いずれも震災を機に立ちあがった若者たちです

若いエネルギーの源は、地域を愛する気持ち

若者ならではの自由な発想で、地域を見つめなおし

若者らしい「ノリ」で、明るく地域を照らし

若者らしく、地域づくりの先輩方から学ぶことも忘れません

新しい芽と大樹が豊かな森をつくるように

世代を超えて豊かな支え合いの関係を広げています

そんな新しい世代が加わった地域づくりの様子からは、  
地域の未来の姿が垣間見えてくるかもしれません





学園祭のパンフレットを手にするおらほ学園メンバー

# 遊び心あふれる、つながりづくりと新しいチャレンジの場

◎南三陸おらほ学園（宮城県南三陸町）

## ポイント

- 誰でも気軽に参加できる「学園祭」でまち全体のつながりづくり
- 「やってみたい」という気持ちがかたちになり、発展していくきっかけに

出店の内容には制限がない。それぞれが自分のやりたいと思うことを思いいにかたちにした賑々

店を行った。展示、作品販売などの出店を行った。の「部活動」として両日あわせて21組が、ワークショップやステージ発表、

2016年10月15・16日に、4回目の開催となる「おらほの学園祭」が行われた。15日は伊里前商店街を、16日には南三陸町ポータルセンターが会場となり、「おらほ学園」

「学園祭」で地域の魅力を発信

宮城県南三陸町で活動する「南三陸おらほ学園」は20歳代後半から30歳代前半の若者を中心としたグループだ。「おらほ」とは、宮城県の方言で「自分のところの」という意味だ。同町を一つの「学園」に、町内で行われている活動を「部活動」に見立て、年に1度の「南三陸おらほの学園祭」を中心に、さまざまな活動やイベントを行っている。

イベントから日常へ  
震災で甚大な被害を受けた同町は、津波被害と震災後の人口流出により、人口が減少し続けている。そんな同町を盛り上げた

当日は500人が会場を訪れ、各部活動の出演を楽しんだ。

しさは、まさに「学園祭」というに相應しい。はじめての年には2週間、2・3年目は1か月の会期を設け、その期間中にそれぞれの「部活動」が同町内の好きな場所ですべてのイベントを行う形式をとっていたが、「部活動」ごとに開催する日時や場所が異なるため、来場者が分散しがちだった。また、来場者はもちろん、出展者である「部活動」のメンバーにも学園祭をとおしてより多くの人と交流を深めてほしいと考え、今年は会期を大幅に短縮し、会場1か所に集約した。



## 南三陸おらほ学園

代表 伊藤 孝浩さん

「活動が一番楽しんでいるのは  
自分たちだと思えます」

内で活動しているさまざまな人・団体に着目し、ふだんは別々に活動を行っている個人・団体同士のつながりをつくり、連携して活動を行ったり、活動について発信していくことでまち全体の魅力を高めることが目的だ。

また、新しく活動を始めたという気持ちはあるものの、きっかけや場所がないという人が、気軽にチャレンジできる場を提供したいという思いから、学園祭への出展料は無料としている。そのため、出展者は同町内でそれを生業としている人から、趣味の範囲で活動を行っている人やはじめて出展する人まで多種多様だ。

1年目、2年目の出展者のなかには、学園祭への出展で参加者からの反応に手応えを感じたことをきっかけに、出展していた内容をそのまま事業化し、現在も同町内で活動をつづけている人もいるという。

「1度きりのイベントとして楽しんでもらえることもうれしいですが、学園祭をきっかけに始めた活動

や、人と人とのつながりが日常のなかに根づいていくことが目標」と伊藤さんは話す。

「部活動」の取り組みを定着させるための取り組みとして、年一度の学園祭のほか、不定期で「おらほ学園新聞」を発行している。

紙面には、「部活動」のふだんの活動予定やイベントの告知などが掲載され、同町の広報誌に挟み込む形で同町内に配付されている。

「学園祭」の開催についても広報誌と連携しての告知が行われている。出店予定の団体の紹介や当日のプログラムなどを掲載した冊子が、広報誌とともに同町内の全世帯に配布されるな



学園祭に行われた餃子づくりのワークショップ

ど、広報誌という公の媒体と連携することで、同町内全域を巻き込んだ活動につながっている。

### これからのまちを担う若い力

「おらほ学園」には震災時のボランティアに参加したことをきっかけにまちへ移住したUターン者や、Uターンをして同町に戻ってきたメンバーも多い。伊藤さん自身も以前は関東や海外で仕事をしてきたUターン者だ。

伊藤さんは「海外から一時帰国したときに目にした故郷の変わり果てた惨状に、自分の無力さを感じたと同時に、故郷へ戻ること

を心に決めた」と話す。また「震災がなければUターンすることもなかった」と言う。

これからのまちを担う若い世代にとって、震災は自分の故郷を改めて見つめなおす機会にもなった。おらほ学園では、定期的に「語らい会」という会を設け、学園のメンバーや町民が集まり、今後のまちのことについて話し合いを

行っている。公のものではなく、仲間同士のおしゃべりの延長のようなざっくばらんな会だが、だからこそ自由な意見や発想が得られ、そのなかから復興やまちづくりに向けての新しい活動が生まれたこともあるという。

多方面に活動の範囲を広げ、若い世代らしいフットワークの軽さを見せる「おらほ学園」だが、「自分たちが好きなことをしているだけ」と伊藤さんは気負いのない笑顔を見せる。

まだまだ復興の道半ばにある同町だが、若い世代ののびのびとした活動が同町の未来を支えていく。吉

#### DATA

### 南三陸おらほ学園

宮城県本吉郡南三陸町歌津皿貝 43-15 (事務局)

TEL 090-6182-2882

URL <http://oragaku.minami3riku.com/>





第6回我歴 STOCKの様子 (写真提供: 古里裕美)

# 音楽の力でまちを元気に! 新しい船を動かす若き力

◎女川福幸丸 (宮城県女川町)

## ポイント

- 音楽の魅力が女川町の住民に活力を与える。町の外から人を呼ぶきっかけにも
- イベントの開催をとおして、町内の他団体と協力し合う関係性が生まれている
- 運営団体の存在が、地域の若者同士の交流の場にもなっている

宮城県内の音楽イベントといえ、ARABAバンド、KIROCKフェス、GAMAROCKフェス、そして定禅寺ストリートジャズフェスティバルの知名度が高いが、女川町で毎年開かれている「我歴STOCK in 女川」も年々観客を増やし、脚光を浴びている。

今年7月10日に6回目の開催を迎えた我歴STOCKは、幅広い世代に人気の「倉木麻衣」をはじめ、女川町出身の「スノーモビルズ」、女川町にゆかりのある「思い出野郎Aチーム」、若者に人気急上昇中の「おひつじ座流星群」や「HANZIBAND」らが顔をそろえた。

企画・運営を手掛けるのは「女川福幸丸」。20〜30歳の代々の女川町の若者が中心の団体だ。今年も、商店街にある女川町まちなか交流館の特設ステージが会場。背景には、足を運んだ人が商店街にも立ち寄ってもらえたら、という同団体の願いがあった。

女川町の住民も、楽しめる側としても参加してい

る。15年のステージでは、女川町長がギターを披露。町内の高校生バンドや有志が希望して出演してきた。

### 出航の日

第1回の我歴STOCKは2011年10月。「女川町で復興イベントを地元の人たちでやりたいというのがきっかけでした」と話すのは、福幸丸の代表である、初代「船長」の佐藤友視さん。

11年の東日本大震災で大きな被害を受けた女川町。その頃佐藤さんは、ラジオから流れる音楽を聴いて、「つらかったな。でも元気を出さないといけないな」と、張りつめた気持ちが和らぎ、勇気づけられる経験をする。「その時に音楽の力を改めて感じた」と振り返る。

同年の夏頃、「震災直後から、ボランティアで歌いに来てくれた人も大勢いました。いつもやってもらって、側じゃいけない」と考えるようになった佐藤さん。「地元の人発信で、イベントをやりたい」と知人に相談したところ、まず仲間を集めるように助言を受ける。友人



初代船長 佐藤 友視さん (左)

2代目船長 植木 智子さん

「女川町が好きで、音楽が好き。皆さんから支えていただいている感謝の気持ちを忘れずに、これからも音楽で女川町を盛り上げたい」

に声をかけ、「たいへんな状況のなかでも、やると言ってくれて助かりました」と3人の仲間と実行委員会を結成。「女川福幸丸」と名づけた。

その由来について、「復興の最中で女川を名前につけた」とまず決めました。

『復興』だとそのままなので、『福幸』とし、『女川だし船みたいな感じにする?』と『丸』をつけました」と説明する。船らしく、「船長」「コック長」などの呼び名もつけ、ユニフォームとして作業着もつくった。

さらに、イベントは「我歴STOCK」と命名。由来は「津波で重なったガレキはゴミのように言われることがあるけど、もとは自分たちの使っていたもの、生きてきた証だとの思い」から「我歴」。「STOCK」は「ウツドストック・フェスティバルという、60年代の伝説的野外イベントにあやかる」意味と、「新たな歴史をこれからストック(積み重ねる)」意味がかかっている。

開催にあたり、町内の企業を中心に協賛を募った。「まちのために若い人がやってくれるから」とたくさん



メンバーは各々の仕事を終えた夜に、定例会議に集まる。

の人が出資や当日の出店に協力してくれた。出演者を集めるため、「女川町のために力を貸してください」と呼びかけ、多くの賛同を得た。第1回の我歴STOCKは、避難所となっていた町内の運動場で開催。避難していた人が主な観客として集まり、盛況の内に終了。

2回目以降はチラシやポスターで告知、テレビや女川のさいがいFMでも話題になり人が増え始める。「女川町のイベントの一つとして取りあげてもらえるようにもなり、うれしい」と話す佐藤さん。

女川町には、女川町復興祭や女川秋刀魚収穫祭というイベントもあり、福幸丸も実行委員会として参加。出店して売上を我歴STOCKの資金に充てるほか、会場設営や接遇を手伝い、運営の経験を積んでいる。そこ

でつながったまちの人とは、我歴STOCKの設営協力や出店をしてもらえる、支え合う関係になった。

### 未来の破片<sup>かけら</sup>

メンバーはみなイベント運営の経験がないところから始めて、回を重ねることにノウハウを積み重ねていった。4人で始めた福幸丸も、20人を超える大船になった。15年からは、佐藤さんが子育てのため一線を退き、植木智子さんが2代目船長として活躍している。

「尊敬する先輩から『やってみない?』と言われ、その気持ちに応えたかった」と植木さん。「みんな、ステージや会場設営などの役割分担があり、個々の得意なことを活かしてしてくれます」と話す彼女は、各担当の統括の役割を果す。町内のほかのイベントの会議に、団体の顔として参加もしている。

我歴STOCKは老若男女を意識したステージ・幅広いジャンルを展開してきたが、今年、音楽だけのステージを企画し、若者をメインターゲットに。結果、他世代の観客からも「新しい音楽を知ることが

できてよかった」と好評だった。今年からは毎月1回、定例会議を開き、メンバー同士がイベントのアイデアを出し合う。福幸丸には、震災後にボランティアや仕事で移住した人も参加しており、イベントや準備を通じて交流の場にもなっている。

今後について、「我歴STOCKらしさをもっと考えられたら」と話す佐藤さん。佐藤さんと植木さんが口をそろえたのは、「まちの人たちへの感謝の気持ちを忘れずにいたい」ということ。これからも、まち全体で取り組んでいく。

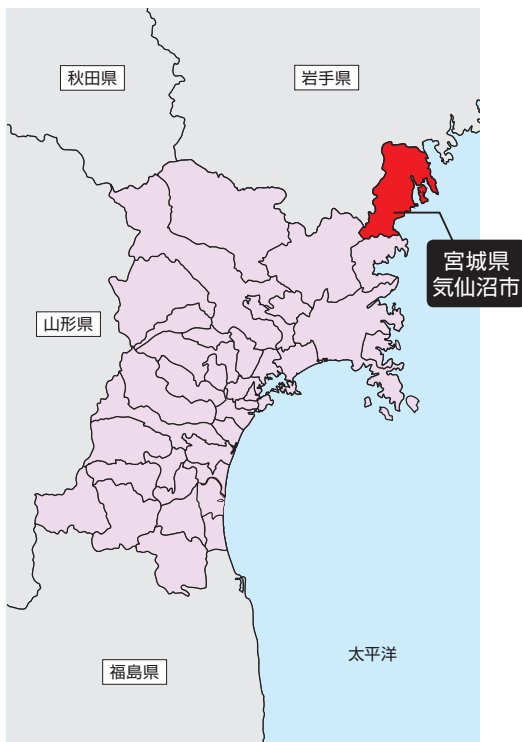
若い風は女川町の港から、自分たちの、女川の歴史を積んだ船を動かす。船はやがて音の波にのって進み、「幸福」をみんなのもとへと届ける。田

#### DATA

#### 女川福幸丸

Mail o\_f@onagawa-fkm.com  
 HP <http://www.onagawa-fkm.com>  
 facebook <https://www.facebook.com/gareki.stock>  
 twitter [https://twitter.com/onagawa\\_fukkou](https://twitter.com/onagawa_fukkou)





# まちの魅力を再発見する 復興コミュニティづくり

◎わかものまちづくりサークル からくわ丸 (宮城県気仙沼市)

## ポイント

- 外部から来た人の視点を借りたまちの「あるもの探し」
- 多世代交流のあるまちづくりを目指す若い世代の取り組み

気仙沼市の北東に位置する唐桑半島<sup>からくわ</sup>には、東日本大震災直後から多数のボランティアが訪れ、まちの機能を回復させるため、活動を行った。「からくわ丸」初代表の加藤拓馬さんも、震災時に唐桑を訪れ、支援団体に所属し活動していたボランティアの1人だ。急性期の支援が落ち着いた2011年秋ごろから、今後必要な支援はコミュニティの再形成であるとの考えから、まちづくりやまちおこしを活動の主軸に据えた。12年5月からは加藤さんをはじめとしたボランティアメンバーと地元の若者を中心に「からくわ丸」を設立。本格的に復興まちづくりのための活動を開始した。

活動の指針となっているのは、熊本県水俣市などで行われている、まちづくり・まちおこしの手法「地元学」<sup>ちかごし</sup>。なにか新しいことを始めるのではなく、もともとまちにあるものを探し、その魅力を再発見し活用するという「あるもの探し」の考え方を基本に、発見したものを発信し、それをもとに今後の地域を考え、活動すること。とで地域住民が主体的に地域づくりにかかわっていけるよう、活動を行っている。

**地元の魅力を再発見する「あるもの探し」**

「外から来た人が、唐桑のためにこれだけ一生懸命に活動していることに、少し嫉妬する気持ちがありました。同時に、地元の住民が行動を起こさなくては、とも思っただんです」と、「からくわ丸」現(二代目)代表の立花淳一さんは話す。

立花さんは唐桑で生まれ育った地元メンバー。「からくわ丸」を地元住民主体の団体としたいという考えから、13年4月に前代表の加藤さんから代表を引きついで。

地元住民が地域の魅力に気がつくためには、きっかけが必要だ。そこで、「からくわ丸」では外から来た人の視点を借りる手法をとっている。

「からくわ丸」のあるもの探し活動の1つである「まち歩き」のワークショップでは、地元の住民が案内役になり、外から来た人と一緒に

地域を歩く。ルールは1つ。外から来た人はいろいろなものに驚き、質問すること。すると、案内役の地元住民は、ふだん当たり前だと思っていたことに、実は価値があるのだということに気がつくことができる。

ふだんの「からくわ丸」の活動のなかでも、地元メンバーと外部からのメンバーが一緒に活動することで同じ効果が生まれている。

「外から来たメンバーには、いつもすごくいい刺激を受けています」と立花さんは言う。地元住民の団体として活動しながらも、客観的にまちを見る視点を保ち続けることができるのは「からくわ丸」の大きな強みだ。

### 多世代交流が根づく まちづくり

「からくわ丸」が現在主に取り組んでいるのは、子どもを対象にした「いなか学校」や「畑づくり大作戦」だ。「いなか学校」では、昔ながらの遊びや唐桑ならではの遊びなどをおして地元の魅力を知ってもらうことを目的としている。

「畑づくり大作戦」は、半農半漁のスタイルが多い唐桑での特性を知ってもらう目的だ。漁業に比べ子どもたちが農業を知る機会が少なかったため、1年をおした畑仕事などを体験することにより、農業を身近に感じるときつけとしている。

また、「多世代交流が普通にできるまちを目指していきたい」という思いから、今後は子どもだけでなく、多世代を対象に活動の幅を広げていきたい考えだ。

地元で生まれ育ったメンバーと、外から来たメンバーが切磋琢磨し合いながら、つながりあるまちづくりを目指す。一人ひとりが当事者として参加する、「からくわ丸」の活気ある活動はこれからの唐桑の核となっていくだろう。吉

#### DATA

#### わかものまちづくりサークル からくわ丸

〒988-0551  
宮城県気仙沼市唐桑町松園234  
(一般社団法人 まるオフィス内)  
URL karakuwamaru.net

大阪市立大学大学院 経済学研究科 教授

#### 福原 宏幸 (ふくはら・ひろゆき) さん

専門は、労働経済論・社会政策・福祉社会論。経済学博士。社会的排除論を切り口に、日本の貧困・不安定就業・地域づくりなどの調査研究と支援策について研究。現在、箕面市生活困窮者自立支援推進協議会座長、八尾市同和問題協議委員会座長、大阪市あいりん地域まちづくり会議委員(2つの検討会議の座長)など。パーソナルサポートセンター(宮城県仙台市)が実施した東日本大震災復興に関する2つの調査研究事業(厚生労働省の平成23年度「東日本大震災復興期におけるあるべき居住セーフティネットに関する調査研究事業」、平成25年度「東日本大震災で生じた地域福祉資源の実態および社会的企業化を促進する仕組みに関する調査研究事業」)の座長など。



### 専門家に聞く地域づくりのヒント

## 被災地で紡ぎ出される 若者の多様な活動が、 まちづくりの未来を担う

被災地では、働く場所の不足から、地元を離れて都会へ移り住む若者があとを絶たない。他方、支援ボランティアとして多くの若者が全国から被災地に集まった。今日、地元に残っている若者たちと後者の若者との復興支援のさまざまな“場”における出会いや協働は、まちづくりや活性化が問われる復興の第二ステージにおいて、新たな展開へと進化している。ここで取り上げられた3つの事例は、その典型的なものであるといえるだろう。

一方で、地元暮らし続けている若者たちは、地域での暮らしのなかに“溶け込んだ”生活文化を生き、それをあるがままのものとして受け入れ、継承し続ける。他方で、外部、とりわけ都会から来た若者たちは、それらの文化を相対化し、それがもつ歴史性や固有性に触発され、新鮮な驚きをもって自らもそこに“溶け込んでいく”ことを目指す。かくして、異なった個性をもつ若者集団は、それぞれの仕方で伝統的な生活文化を生き、それは時には対立や軋轢をはらみつつも、その先に絆づくりをおして地域の新たな文化の創出基盤を形成する。

その基盤をおして生まれてくるものは、多様である。ある地域では、①固有の伝統文化が若者の感性をおして発見され昇華されて、魅力あるものに再生されていく。異なる地域では、②両者の若者集団の絆の強化をおして、独自の若

者文化の創出やまちづくり活動の新たな形成というかたちをとる。また別な地域では、③若者たちのそれぞれのニーズを拾い上げ、緩やかだが持続性のある一つの活動に結実され、同時にそうしたものがたくさん創り出され、さらにそれらがまた融合していくことでまちの活性化が進む。

ここに紹介された3つの事例は、まさにそうした事例であるだろう。南三陸町の「南三陸おらほ学園」は、①の活動を軸に据え、③の活動につなげようとしている。女川町の「女川福幸丸」は、音楽の力を活用して②を追求し、さらに世代を超えたつながりの広がりを目指している。気仙沼市唐桑町の「わかものまちづくりサークル からくわ丸」は、①と②の融合を図りながら、まちづくりの核となることを目指している。

他の地域では、また異なった取り組みのかたちがあるかもしれない。それぞれの地域の若者の活動主体ができあがる経緯や当事者の個性によって活動は多様性があってよい。否、多様であることは、まちづくりの新たな展開にとってむしろ必要であろう。しかし、何よりも大事なものは、若者たちのいずれの活動も、被災地の多くの居住者とのつながりとそこの生活文化を基盤にし、“未来に向けての希望”を与えるものとなることである。こうした活動が、被災地のいたるところで広がっていくことを期待したい。



DATA

はんざわ商店

〒986-0821

宮城県石巻市住吉町一丁目5の28

TEL&FAX 0225-22-2043

34回目

市民リレー

# 東北の元気

今回は...

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

ともしび

## 復興の灯となり、 いまも地域を照らし続ける光

◎はんざわ商店（宮城県石巻市）



店内の買い物風景。左が店主の榛澤哲夫さん

店の外観

店内でお客さんや友人と語らう

石巻市住吉町にあるはんざわ商店は、東日本大震災前までは3代にわたって85年続いた豆腐店だった。それが2011年の震災で被災して、製造用の機械が全壊。店主の榛澤哲夫さんは「明日からの生活をどうしていいかわからなかった。家があるだけいいから我慢しなきゃとも思っただけ、生活のための生業がなくなることが一番たいへんでした」と回想する。

そうした状況でも、震災後ほどなくして、榛澤さんは自分の店を地区の配給所として登録。市役所や自衛隊から配給された水や食べもの、衣類品などを保管して、周辺住民につないでいた。

12年初頭には、店を修繕して商店としてオープン。主に食料品を販売。店内の備品は新たに買った、友人やかつての取引先から譲ってもらったりしてそろえた。商店を開いた理由は、「その頃は近くに年配の方々が買えないものに行ける場所がなく、車もなかったから。また、震災の状況があつて、みんなで集まれる場所が必要だと思つたから」と語る。

店内には休憩スペースを設け、お茶飲み場としても使えるようにした。「先のことを考えるよりも今日、明日のことを考えて、近くの住民の力になれるようにしなければと思った」とその頃の心境

を語る。

震災から時間が経つたいまでは、ほかに移住した人もいて、周辺住民の数は減つた。近所には大型店ができ、車で買ひものに行くことができるようになった。榛澤さんは生活のために日中は知人の仕事を手伝い、はんざわ商店は夕方から開店してみんなに利用してもらっている。「周りの生活が整い、店に求められるものは減りつつあるのかもしれない。そのときどきの必要なことがあつて、先に進んで変わっていくことが復興していくことなので、仕方ありませんね」と榛澤さんは言う。それでも、車を持たない高齢の住民は近くにある店の存在に感謝をしている。毎日、買ひものがてらに世間話をしていく人や、お茶飲み話を楽しみに通つて来る人もいる。店の存在は、いまも地域の光になつているのかもしれない。

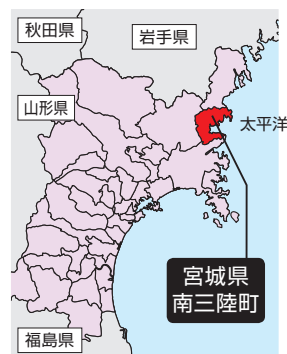
榛澤さんはお店のほかに、趣味で20歳代の頃から合唱の活動を続けている。いまは「音楽が大きな心の支えと力になつていきます」とも話す。店のなかには音のためのピアノがあり、時間があるときは弾いて楽しんでるという。

榛澤さんの想いが込められた同商店は、住民が気軽に立ち寄り、和める場所だ。



# 住民を信じ、支え合いの力を引き出す

## 宮城県南三陸町



仮設の復興商店街やユニークなモアイ像がシンボルにもなっている宮城県南三陸町は、人口13571人の港町。東日本大震災により、建物の3143戸が全壊、178戸が半壊・大規模半壊の判定を受けてい

て、それらは町内全体の約62%にあたる。町内外の人を合わせ、620人が津波などで亡くなり、さらに212人が行方不明となっている。人口は震災前の2011年2月に比べて約4100人減少した(2016年10月時点)。

震災後、町民用の仮設住宅は58か所に計2195戸整備。うち6か所の計486戸は隣接する登米市に建設された。現在は、全体で777世帯2277人が入居している、うち登米市内の住宅には174世帯440人が暮らしている。そのほか、みなし仮設(借

り上げ賃貸)住宅として235世帯がアパートなどの供与を受けているが、同町内の賃貸住宅を利用して

いるのはわずか14世帯。52世帯は宮城県外のアパートなどに暮らしている。災害公営住宅は、戸建てや集合住宅形式で8地区に738戸の建設が計画され、うち6地区の478戸が竣工された。また、防災集団移転は、20地区に28団地の整備が計画されていて、19地区27団地がすでに完成している。

### 生活再建に向けて寄り添う

町では、仮設住宅団地・みなし仮設住宅における孤立防止やコミュニティ形成を支援するため、「被災者生活支援センター」の運営を町社会福祉協議会に委託。現在、志津川・歌津・戸倉地区の町内3か所と登

米市南方地区の計4か所に配置されたサテライトセンターで、30人の支援員が活動している。

仮設住宅には空室が増え、日常的に交流できる近隣住民が減っている。入居者がますます孤立しかねない環境になっているが、支援員が体操やゲームなど、介護予防にもなる活動を集会所で開催し、その場でお茶飲みや談笑の時間がつくられるように働きかけている。孤立の恐れが高まっている一方で、入居率が高かった頃には仮設住宅団地

ごとの人数が多くてじっくり話す機会をもてなかった人とも、深く話す時間を取れるようになったという。

また、入居率が低くなると、自治会の活動もそれまでのように円滑にはできなくなってしまう。ほかの仮設住宅団地の入居者や地域住民と合同で行事を開催す

るよう、町社協が働きかけることもある。町内会役員や、民生・児童委員、漁業協同組合の職員など、地域に根差した人と仮設住宅入居者などが交流を深めても

らうことで、地域における住民の活性化も目指す。民生・児童委員などは、支援員と異なり、ずっとその地域で気になる人を見守ることができるといふ長所があり、仮設住宅入居者との顔つなぎを支援員に手伝ってもらいながら関係性を深めていく。

支援員は、入居者から受ける相談の内容によって、町保健福祉課被災者支援係に問い合わせるよう促したり、同係に情報を提供することもある。戸別訪問をしているなかで、精神障害、認知症、生活困窮などの課題がある場合は町の担当者へ連絡し、情報共有したり、見守りの目を向けてもらう。



LSAが常駐する戸倉地区災害公営住宅の集会所

特定延長のかたちで利用されている同町の仮設住宅は、17年度中に集約・解体される団地が多い。同係では、転出後の生活の意向についてアンケート調査を行い、詳細未定の入居者のもとへは直接訪問して情報提供をし、相談ののついでに費用の補助金に関する相談などが多く寄せられる。



「もともと住んでいた地域よりも、いまの仮設住宅のある地域のほうが利便性が高くて、もとの地域に戻るかどうかで迷っている」など、まだ確かな計画を立てられていない入居者はおよそ20世帯。最後の1人まで、社協も町も真摯に向き合う。

### 新たな住居をより住みやすく

同町の災害公営住宅は、保健福祉課が住宅整備の担当部署と話し合いを重ねたうえでデザインが決められた。2棟の玄関を向かい合わせることで、入居者が顔を合わせやすいようにしたり、玄関の明かりが点いて



あちこちの地域に住民がはつらつと集まるたまり場がある

いるのが近所からもわかりやすいようにしたり、住民同士で見守りをしていくことを念頭に置いた構造に工夫した。また、集会所に高齢者生活相談室を設け、整備戸数60戸以上の団地に町社協のLSA（生活援助員。ライフサポートアドバイザーの略）が常駐している。LSAは現在5か所の住宅に12人配置されていて、来年新たに建つ災害公営住宅の完成に合わせて、最終的に6か所14人に増える予定だ。

仮設住宅で活動する支援員同様に、独居高齢者や認知症の入居者など、気になる住民のところへ定期的に訪問して様子を伺うほか、入居者同士がつながりをもてるよう支援している。町社協には、震災後に支援員が5年間かけて足で稼いだ住民の情報がある。それをLSAが引き継ぐことで、災害公営住宅に入居するすべての世帯に関して、出身地域や家族構成など、なんらかの情報をもった状態で住宅に迎え入れることができる。

入居者に事故が起きたと

きなどの、それぞれの家族の緊急連絡先も知っているLSA。支援員を務めた経験や個人の持ち味を生かし、地域ごとに合った方法で、入居者を見守っている。1人で暮らしている入居者の家族から、「（入居者に対して）1日1回は声をかけてほしい」といった要望を受けたり、入居者から「あんたたちがいたら安心だ」と言ってもらえたりと信頼も厚い。

自治会が立ち上がるまでの入居者同士の交流、つながりづくりもLSAがサポートしているが、自治会の設立に向けた支援は、被災者支援係など役場関係部署が音頭をとっている。入居者が集会所で顔合わせをして交流を図り、部屋の階ごとに班を分け、班長を選出。班長のなかからさらに自治会長を決め、その住宅の自治会を引っ張ってもらえるように働きかける。

### 住民のエネルギーに

#### 目を向ける

「公的なサービスだけで一人ひとりの暮らしを支え



支え合いをたいせつにし、積極的にボランティアに励む

きることは難しい。コミュニ

ニティづくりが最大のポイント」と話すのは、町地域包括支援センター所長の工藤初恵さん。被災後、住民はさまざまな支援を受けるなか、自分の力を発揮して頑張ることができるようになった人と、反対に不安が増す人がいて、格差が生まれていることを気にかけている。

地域包括支援センターでは、地域コミュニティの絆をたいせつにしてきた住民が、自分らしい生活を送り、住民参加の地域づくりができるように応援するため、

震災後から「輝き通信」を発行。地域のご近所グループが集まる場などに伺って、住民間の支え合いを掘り起こし、紙面で紹介して、町内全戸に配付している。被災者生活支援センターは、「もの・人は少なくなっってしまったが、地域のあたたかさは健在。本当にたいせつなときに住民が力を発揮できるよう、手をかけすぎず、住民が生きがいをもって楽しく過ごすための後方支援に力を入れる」と語る。

町外からの支援・ボランティアに感謝し、支え合いの必要性を強く感じることで、「ほっとバンク」という登録制ボランティアのメンバーとして活動するようになった住民も増えているという。昔から挨拶や食事のお裾分け、ちよつとした手伝いなど、ご近所つながりを大事にしてきた地域性は、簡単には失われな

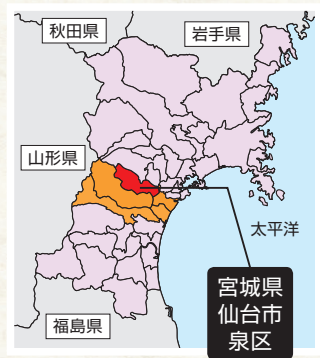


# みんなで作る 季節のイベントで 交流を深める

泉中央南復興公営住宅  
(宮城県仙台市泉区)



二胡の演奏にあわせて参加者の歌声が響く



仙台市泉区に建つ泉中央南復興公営住宅で、今年10月29日(土)にオータムコンサート&芋煮会が開催された。

同住宅では2015年12月、独自に「泉中央南町内会」を設立。住民同士の交流を促進するため、みんなで顔を合わせる機会をもうけたいと、これまで月に1回のうたごえサロンや、季節ごとのイベントを行ってきた。特に今夏に開催した夏祭りが好評だったため、秋にも何か季節感のある催

しを行いたいと今回の芋煮会が企画された。

芋煮会の前日から、同町内会の役員や同住宅の各階ごとに任命された班長を中心に食材の下ごしらえなどの準備を行い、約80人分の芋煮とおにぎりを用意。調理は主に女性が、屋外での火の準備などは男性が担った。準備に参加した住民は「一緒に準備をすることで、

いままであまり言葉を交わしたことがなかった人と距離が縮まった。たいへんだったけど参加してよかったと思う」と話した。

同町内会は、泉区や、区社会福祉協議会、地域包括支援センターなどの公の機関とも連携して活動を行っている。町内会設立の際に助力を受けた泉区まちづくり推進課とは特に関係が深く、イベントの際にも協働することが多い。今回のオータムコンサートも同課からの提案により、同課職員が所属する二胡とアルプホルンのアンサンブルトリオ「アマルフィ」の演奏が披露された。「みかんの花咲く丘」や「月の砂漠」「見上げてごらん夜の星を」など、誰の耳にも



芋煮とおにぎりを食べながら談笑する参加者

慣れた曲を多く盛り込んだプログラムに、参加者は演奏に合わせて自然と歌を口ずさみ、リズムに合わせて手拍子をするなど、アットホームな雰囲気コンサートを大いに楽しんだ。

演奏のあとには、同町内会長の中村照蔵さんが防災についての講話を行い、自分や家族の命を守るためには、日頃からの備えが重要であると説いた。

芋煮会の時間になると、参加者全員で協力しながら会場の準備や配膳を行い、温かい芋煮とおにぎりに舌鼓を打った。

同町内会副会長の佐々木かつ子さんは、「たくさんの人にきてもらえてよかった。今後はこれまでに参加してい

ない人に来てもらうことが目標」と話す。町内会設立から1年が経とうとしている昨今、活動も少しずつ軌道に乗り、それぞれの会への参加人数は少なくないが、参加者の顔ぶれが固定しがちだという。そのため、イベント以外にも交流の機会をもってもらおうと、11月1日から班を決めて公共スペースの掃除当番を開始した。「些細なことですが、これをきっかけに、まずは顔見知りを増やしてほしい。廊下で会ったときに挨拶ができる人が増えるのは、素敵なことだと思うので」と佐々木さんは微笑む。

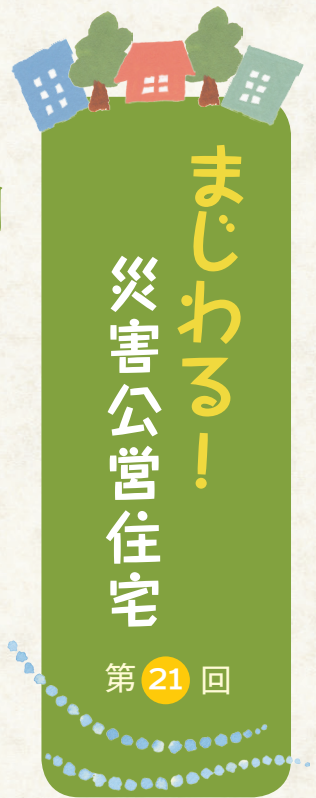
自分たちの足で歩き始めた町内会は、今後も試行錯誤と工夫を重ねながら前に進んでいくだろう。吉

## DATA

### 泉中央南復興公営住宅

仙台市泉区唯一の復興公営住宅。10階建て1棟に193世帯が入居している。



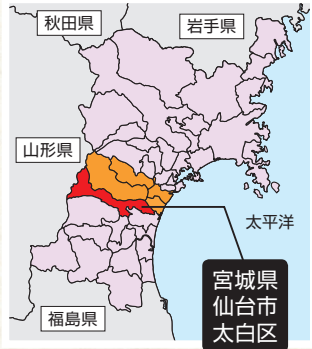


# 地域団体の支援により 経験を積んだことで、住民の 主体的な活動につながった事例

鹿野復興公営住宅  
(宮城県仙台市太白区)



2015年12月に行われたクリスマス会の様子



まじわる!  
災害公営住宅  
第21回

仙台市太白区鹿野本町に建てられた鹿野復興公営住宅は2014年7月入居開始。5階建て2棟、内1棟はペット棟。全70戸中、16年10月現在で67戸が入居済みだ。

入居者が地域に早くなじみ、安心して暮らせるように、仙台市社会福祉協議会太白区事務所などが働きかけ、14年1月に鹿野地区連合町内会、同地区社協、同地区民生・児童委員協議会、長町地域包括支援センター、太白区役所などで構成される鹿野復興公営住宅

支援者連絡会議を設立。同連絡会議は、支援方法などを学ぶ研修会を行い、生活者目線で、地域の暮らしにすぐに役立つ「地域情報マップ」を作成した。支援者が入居直後から全戸を訪問し、氏名、家族構成などを聞き取り、支援に必要な名簿を作成した。

その後、入居者同士や支援者側と顔を合わせ、知り合う機会として、交流会を開催し、14年10月に芋煮会、12月には合唱の名門・三桜高校音楽部を招いてクリスマス会を実施した。交流会のもう一つの目的は、住民のなかから世話人を見つけ出すことで、支援者と会話するなかで世話人となる住民を選んだ。同年11月以降、世話人10人で自治組織について6回の話し合いを集中的に行った。その結果、15年1月に住民総会を開き、既存の鹿野町内会に加入することが決議された。あわせて、町内会と連携しながら世話人会が引き続き活動していくことも承認された。



見守り訪問中の平賀道子さん(左)と那須京子さん

住民の交流拠点である集会所は15年5月に完成。計画当初から入居者と地域住民が共用する計画があり、「ホールは100人収容」など、町内会の要望が反映され、前庭や駐車場も広く、建物と一体的に活用できるので、祭りなどの大きなイベントなどでも非常に使い勝手のいい集会所となった。集会所を拠点に世話人会やカラオケなどのサークル活動も定期的に開催できるようになった。世話人会は、放置自転車、ゴミ出し、雑草、ペットの問題などを関係機関と調整しながら一つひとつ解決していき、残暑まつり、芋煮会、クリスマス会などの大きなイベントも地域住民と協力し成功に導いた。こうした経験を積み重ねたこと

で世話人が活動に自信と誇りを持てるようになり、住宅内の大きな課題である高齢者の孤立防止、見守りにも取り組むこととした。毎月2回、住民のなかから選ばれた福祉委員4人が2人1組で、75歳以上の住民を対象に戸別訪問し、見守り活動を行っている。住民からも徐々に受け入れられ、いまでは福祉委員の来訪を心待ちにするようになってきたという。福祉委員の一人は「毎回の見守りが楽しみ」と話す。また、この見守り活動とは別に、住民の一人が毎日、全世帯を夜間巡回しており、こうした活動も住民の安全安心につながっている。さらに、世話人の那須忠雄さんは、地域の老人クラブの会長や町内会の総務部長を務めるなど地域団体の活動の中核を担うような人材となった。那須さんは活動の秘けつについて、「冗談を言っただけで、手に笑ってもらいながら、用件を伝えると聞いてもらいやすいです」と話す。住民の主体的活動から新たな人材が育成されていることにも注目すべきである。



## ● Profile

ご近所福祉クリエイター 酒井保 (さかい・たもつ)

1961年広島生まれ。知的障がい者施設、市町社会福祉協議会、認知症グループホーム・小規模多機能型施設の施設長職を経て、2014年8月に「ご近所福祉クリエイション」を創設(主宰)。ご近所福祉クリエイターという肩書きのもと、広島と仙台を拠点として、全国各地を講演行脚中。

2016年度より、宮城県塩釜市をはじめ岩手県・宮城県・福島県で地域支え合い活動の立ち上げ等にかかる諸事業に参画。イラストレーター。

主な著書に、「見守り活動」から「見守られ活動」へ(CLC発行)、「生活支援コーディネーターと協議体」(共同執筆,CLC発行)。



# あなたには、 ホンモノの支え合いが 見えますか？

ご近所福祉クリエイション主宰 酒井保

## 支え合いの評価基準

「皆さんの地域では、住民の皆さんがお互いに支え合っていますか？」

ある町の福祉講演会へ登壇させていただいたとき、聴衆の皆さんに、この質問を投げかけてみた。隣同士、顔を見合わせ、「支え合っているよね？」と確認しながら手をあげる人。腕組みして首を横に振る人……反応はさまざまであったが、そのなかに指折り数えながら何かを唱えている人がいた。

「指を折りながら何を数えておられるんですか？」と訊ねると、「支え合っていますよって聞かれたんですよだから数えているんですよ」「えっ？数えているって何を？」「支え合いの数ですよ」と。

「うちの地域は、ほかの地域に比べて、ふれあいサロンの箇所数も12か所と多いほうだと思う。一人暮らし高齢者の見守り活動も月に2回。配食サービスもやっているからね。まあ、支え合っていると云えるんじゃないですかね。行政からの助成金ももう少し増えれば、活動の頻度も増やすことができるんですよ」

その言葉に「うんうん」とうなずいている人たちがいた。支え合いの基準が、ふれあいサロンの箇所数だったり、見守り活動の頻度だったり、給食サービスの有無だったり。行政あるいは、社会福祉協

議会などからの援助により実施している事業の数を支え合いの基準になっていることか？そもそも「支え合い」とは、なんであったか？

## 「支え合い」という事業

「支え合い」を考えていくうえで、僕が愛読している『大江戸ボランティア事情/田中優子・石川英輔著』(講談社文庫)に次のような記述を見つけた。

「向こう三軒両隣の精神が息吹いていた時代には、暮らしの中に「支え合い」「見守り」が当たり前にあつたから、そのことを表す特別な用語(支え合い、見守りという言葉)は必要なかった」

「支え合い」とは、本来、地域住民の暮らしのなから醸成されるべきもので、事業として推進されるものではなかったはずである。しかし、いまの時代はプライバシーというものが、その条件を阻害しているため、本来の「支え合い」が醸成されにくくなったのだという。

プライバシーということに、いまほど執着がなく、お互いの暮らしの様子がタダ漏れだった時代には、余計なお世話も含めて、日常のなかに「支え合い」があつた。それは、見たくなくても見える、聞きたくなくても聞こえる、ご近所同士の暮らしの様子に「気になる」という感情を揺さぶる情報が確認されたときに、じわじわと動

き始める。「気になる」という感情は、「放っておけない」という行動へ移行するための起爆剤となる。

お互いに干渉し合うことがタブーとなつたいまの時代、「気になる」という感情は生まれにくくなつた。だから、わざわざ「ふれあいいきいきサロン」や「見守り活動」を事業として立ちあげ、「気になる」という感情を揺さぶり合わせるければ、「支え合い」が醸成されにくくなつたということだろうか。

## 「見守り活動」とは言わない

## 「見守り活動」の発見

そんな疑問を払拭するイベントが、2016年3月17日 福島県郡山市で開催された『郡山市「通いの場」普及推進大会』と題するこのイベントの趣旨は、声をかけ合ったり、お裾分けをし合ったり、という地域の日常にあるホンモノの支え合いの風景を切り取って、その価値を評価・共有していかうというもの。このイベントの進行役を仰せつかった僕は、ここにエントリーされた16事例のなかに、なんとも言えないホンワカした支え合いを見つけた。

それは、「駒板おさんぽ会」という年配の女性4人が、決まった時間に集まって犬の散歩をしているだけという活動。そもそも、『駒板おさんぽ会』とは、この場で紹

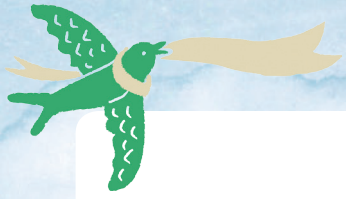
介するためにわざわざつけられた名称で、もともと名もない「女性4人の日課」であつた。

ただ、犬を散歩させているだけの構図……しかし、この日常には、ホンモノの支え合いを醸成させていくドラマが潜んでいた。たとえば、「4人のうち1人が時間になつても来ない」という状況があれば、「気になるから様子を見に行こう」と、3人がその人に家に行つて様子进行。「あれ？風邪ひいて寝てんのか？じゃあ、代わりに犬を散歩に連れて行ってやっからな」という展開になる。散歩から帰れば、「食欲あるか？お昼には、お粥を拵えて持ってきてやっから。なんか、いるもんがあつたら買ってきてやろうか？」と気遣う言葉がかけられる。これこそが、ホンモノの支え合いでありいまの時代に私たちが欲している「向こう三軒両隣」ではないか？この価値を共有していくことには大きな意味があると思う。

人が集まる日常には、集まった者同士が「気になる」という感情を揺さぶり合っている。そこからホンモノの支え合いが醸成されていく。事業としての支え合いも必要であるが、それだけを支え合いの指標としていいのだろうか？「見守り活動」とは言わない、見守り活動「ふれあいサロン」とは言わない、ふれあいサロンは、地域のあちこちに潜んでいる。それに気づけない僕たちがいる。



# 宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ



## サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

### かさ袋ロケット、発射！

11月の日曜日、石巻市で宇宙科学教室を開催しました。子どもたちが目を輝かせてつくった、かさ袋のロケット。でも、ロケットがうまく飛ばなくて、何故かと思案する子ども。

見かねた(?) 親が、子どもをそっちのけで修正に熱中! こんな光景をとでもなつかしい想いで観ました。

定員30人で募集しましたが、定員オーバーの盛況ぶり。私は、横浜の研修を切り上げて会場入り。元JAXAのMさんや学生のエデュケータの問いかけに、しっかりと応酬する子どもたち。宇宙・ロケットなどの知識の豊かなこと、好奇心、興味・関心の旺盛なことに、主催者として「シテヤツリ」感。暮らしを支えるうえで、高齢者のこともたいせつに考えていますが、やはり子どもの笑顔に勝るものはない、というのがお爺ちゃん、いやグランパとしての実感です。

街中を徘徊している若者は多いけれど、地域で遊んでいる子どもの姿を見る機会はトンと減ったように思います。子どもも習いごとなど忙しいようで、私からすると気の毒。遊ぶことが子どもの役割と想うのは間違いなのだろうか?

いじめや虐待、そして貧困、暗い話題が『子どもたち』を侵食しています。宇宙教室と名を打った今回の企画、遊び心を膨らましていくことができれば、このうえのない学びを子どもたちは得るのだ、と勝手に確信しています。

同時に、親子での参加を基本にしたことで、引率で来ただけの様子だったお父さんが、いつの間にか子どもからロケットを横取りして苦戦している姿は、何十年も前の私のように苦笑い。つい、お母さんがいつもの調子で「ダメ出し」し、それにくじけて涙目の子どもに学生のエデュケータが寄り添い、友だち目線で協働作業すると、笑顔が戻っていました。『がんばったね!』と声をかけると、『キョトン』とした表情。最後までがんばったことをほめるつもりだったが、こんなことでほめるのか、と見透かされてしまいました。ロケットのつくり方の正しい方法を自ら体感できたので、変にほめなくてよかったのだ、とグランパは教えられました。

## ひとりごと

サポーターのあなたへ

宮城県サポートセンター支援事務所  
アドバイザー 浜上 章



### 被災地での感動の出会いから(2)

『社協のどんな仕事も、みんな地域福祉につながっているんだよ』と、メッセージを残して急逝した人がいた。“ふくし版竜馬”の手綱が制御不可のいま、戸惑いつつも共感し、裏で支える凛とした女房役の人がいる。

保障された再任用の道を捨て、震災後の厳しい被災地にテントと寝袋持参で駆けつけ、復興後の地域づくり・人づくりを見据えた“宮城版被災者支援のモデル”を実践した熱き人がいる。企業の要職を捨て、遠くに家族を残したまま被災者支援の事業体統括者として赴き、奮闘している人がいる。仮設住宅の自治会役員会では、あとの懇親会参加を自らに課して酒を酌み交わし、住民に溶け込んで再生への道とともに歩み、結婚と新たな旅立ちの日には、多くの仮設住民から盛大な祝福を受けた人がいた。震災ボランティアから支援員になり、〇〇レンジャーの衣装をまとい子どもたちを元気づけ、集団移転先の地域住民の生きる力、つながりを支援し続ける若き“ガッツ”の人がいる。優しい気配りと強い信念を胸に、支援関係者と力を合わせ、キーマンを陰で支えて被災者支援の道筋づくりの裏方に徹した人がいた。介護職から被災者支援の現場責任者になり、ひたむきに支援員と被災者を元気づけた人がいた。津波で配偶者を亡くし、悲しみをどこかに伏せて子どもの成長と被災者支援・地域福祉の仕事を楽しんでいるように見える肝っ玉の据わった人がいる。美容の世界から支援員に転身、仮設住宅の扉も心も閉じた人に泣きながらもあきらめない訪問をとおして、扉と心が少しずつ開かれ、信頼と希望を引き出した若き麗しの人がいる。21年前の大震災、被災者支援の経験を活かして東北の地で支援員の研修に日参している人がいる。うまくいったことも辛い経験も同じ支援者目線で、溢れる愛のエールを送り続ける人がいる。

大震災という出来事そのものを変えることはできない。ただ、震災を機に体験し出会ったこと、感じたこと、学び気づいたこと、生まれたものは大きく計り知れない。大きな“負の経験”は、大きな“正の経験”を生み出す。こんなにもすばらしい人たちがいるんだな〜と、人間賛歌とともに一人ひとりのなかに“神性さ”を観た思いがする。

### 平成28年度 宮城県被災者支援従事者研修事業

#### ステップアップ研修

【仙台会場②】12月26日(月) 宮城県自治会館  
講師：永坂 美晴(明石市望海在宅介護支援センター センター長)

#### 分野別研修Ⅰ 子育てと子育て家庭への支援の形

【石巻会場①】1月11日(水) 石巻市河北総合センター(ビッグバン)  
【石巻会場②】1月12日(木) 石巻市河北総合センター(ビッグバン)  
【気仙沼会場】1月23日(月) 気仙沼保健福祉事務所  
【仙台会場】1月24日(火) エスポールみやぎ  
講師：塚本 秀一(社会福祉法人 湘南学園 専務理事、保育の家しょうなん 園長)  
門馬 優(特定非営利活動法人 TEDIC 代表理事)

宮城県サポートセンター支援事務所

〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町3-7-4 宮城県社会福祉会館3階 TEL 022-217-1617 FAX 022-217-1601



今回は...

# 東北の元気

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

## 被災した集落を見つめなおし、魅力を生かす

◎一般社団法人 はまのね (宮城県石巻市)

宮城県石巻市、牡鹿半島の蛤浜はまぐりに面した高台の古民家を改修した「Cafe はまぐり堂」は、30弱の客席に対して、休日には約100人が訪れる憩いの場だ。店内の一角からは綺麗な海と山を眺められるが、高台の麓へ視線を落とすと、東日本大震災まではここにあった民家の基礎部分だけがとり残されている。

津波で被災する以前は、蛤浜集落には9世帯が暮らしていたが、現在は2世帯のみになった。集落を存続させるため、2013年3月11日に自身の実家をカフェとしてオープンさせた、亀山貴一さん。「一般社団法人はまのね」を設立し、代表理事を務めている。ほかの地域へ移り住んだ隣人の家を買取り、革製品・陶器といった手づくり小物や古道具などの雑貨屋「高見」も営む。

高見で取りあつかう雑貨は、石巻市内の作家のものが中心。スタッフは市外からの移住者やUターンしてきた地元出身者で構成され、アルバイトを含めて10人ほどの雇用を生んでいる。



浜を離れて内陸の災害公営住宅などに暮らす人にとつては、カフェが彼岸などには帰る場所になった。住民も、日頃からはまのねの活動を応援しているし、地域内外の人がはまぐり堂を介してつながっている。

昨年始めたマリネリジャーのほかにも、民宿、畑、養蜂、獣害対策を兼ねた鹿の狩猟・加工など、今後活動の幅を広げる予定だ。「新しい里をつくり直すしかない。震災前には戻せないけれど、さまざまものを一からつくるおもしろさがある」と亀山さんは語る。「被災地」でありつづけるのではなく、また派手な観光地を目指すでもなく、この浜の魅力ある暮らしを生かしていかうと奮闘する。 **清**

### 購読者を募集しています!

「月刊 地域支え合い情報」を年間購読しませんか?

購読会員 年3,696円(年12回、送料込み)

購読ご希望の方は下記口座へお振り込みください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。

◎お振込先 ●ゆうちょ銀行振替口座  
 口座番号: 02260-9-46303  
 加入者名: 全国コミュニティライフサポートセンター

\*通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、

①お届け先の住所 と ②何号からの購読申込み を記入してください。

### 読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ(地域づくり)から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

50号のしわ元気村の記事を拝見して、働き手がサービスを提供しやすいスタイルに、という視点の柔軟さにハッとさせられました。お客さんはもちろん、働くスタッフも地域の一員。それぞれの立場に沿った心地よさを追求する姿勢はきっと、「共生」のまちづくりを進めるうえでとても大事なものですよね。(山形県A・O)

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください!  
 TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737  
 E-mail joho@clc-japan.com

### 【おわびと訂正】

本紙51号9ページに掲載した「一般社団法人日本カーシェアリング協会」(宮城県石巻市)の記事中、右端の写真の脚注に誤りがありました。人物の紹介が「木村さん(前列右)」となっていました。正しくは「木村さん(前列中央)」です。また、「決算の集まりを終えて」となっていたのが、正しくは「精算の集まりを終えて」です。お詫びして訂正いたします。

バックナンバーがホームページで読めます!  
[http://www.clc-japan.com/sasaesai\\_j/](http://www.clc-japan.com/sasaesai_j/)